

---

# スワンブ

アンデッド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
スワンプ

【Nコード】  
N6828H

【作者名】  
アンデッド

【あらすじ】  
いつも通りの平凡な起床。前兆もなく突然起こった人知を超える異変。夢と現実の狭間で、少女の思考は引きずり込まれる。『夏のホラー2009』参加作品です。

枕元に置かれたデジタル時計のアラーム音がしつこく鳴り響き、  
あたしは女子高生の朝という現実に取り戻される。

デジタル時計のディスプレイに浮かぶ赤い数字を、不機嫌な気持ちのままぼうつと眺めた。

乱暴に時計を止めて、しぶしぶベッドから上体を起こす。

カーテンの隙間からは暖かそうな朝日が入り込んでいて、辺りを少し明るくしていた。ベッドの脇の壁にある電気のスイッチを入れて、部屋をより明るくする。

今日は晴れか。

まあ雨よりはマシだね。

だけど、学校行くのめんどくさ……。

寝癖で酷く乱れた髪を手で押し撫でる。溜め息混じりで髪を適当に整えつつ、床に足をつけて立ち上がった。

あたしは寝ぼけてかすむ眼をこすり、向かいにあるドアを目指してよろよろと二三歩踏み出す。

不意に、足の裏に妙な感覚。

なんか柔らかいものを踏んだような、それが足の指の間にニユルツと入ってくるような……。素足で砂場を歩いた時みたいな、変な感じ。

すると同時に、足が重くなった。気のせいかと思ったけど、そうじゃなかった。

下を見ると、足がフローリングの床にめり込んでいる。床の木目もそれに合わせて液体みたいに變形していた。

あたしは反射的にもがいた。

しかし、余計にズブズブと沈む。

「なによこれ！」

……既に太股まで浸かってしまっていた。  
一気に目が覚める。

何が起こっているのか、まるでわからない。

これはマズい、と思つてとりあえず動くのを止めると、沈む速度は遅くなった。ひと安心。

何気なく、手のひらで床にそつと触れてみる。

手が床をすり抜けた。まるで泥を触った時のような感触だ。特に熱くもなかったし、冷たいわけでもなかった。比較的、体温に近いのかも。

沼みたい。

なんとなくそう思つた。

なら、いずれ下の階に落ちたりして。ここは二階だしね。

あたしはのん気にそんなことを考えていた。

少し経つと、あたしの腰が床になった。

下の階に抜けるなら、もう足をバタバタさせてもいい頃合い。

けど脚は、沼にハマったまま。脚の自由も利かず、動かすことは出来なかった。

これ……下に落ちないの？

その間もゆつくりと、確実に沈んでいく。下半身に絡みついた底なし沼。

流石のあたしも、今さらながらに恐怖を感じた。段々と血の気が引いていく。

ならもういつそ 弱い美少女のように、悲鳴みたいに叫んでみよう。柄じゃないんだけど。

あたしは、思いつきり叫んだ。

……口がパクパクしただけ。声という音が全く出ない。  
なぜに？

と思ったあたしが、そのあと目にしたこと。

それは、あたしにそっくりな女の子が、目の前でいそいそと髪を整えたり、制服を着たりしているシーンだった。

深呼吸する。

はーん、なるほどね。

あたしは、今まさに登校の準備をしているところなんだね。

……………これ夢だ。

変な夢だ。

あたしは自分が日常的に行っている行動を、ずっと側で静かに見ていた。

準備が済んだ彼女は、あたしに気づくこともなく部屋を出ていく。  
ドアが閉じられ、部屋にはあたし以外誰もいなくなった。

そう、これは夢なんだ。

今あたしは夢を見てるんだ。

夢なんだから、全身が沈むとあたしの目が覚めるとか？  
ありがち。

そんなバカなことを考えている間も、時間と共に身体は床の中へと沈んでいく。

あたしの身体は、得体の知れない水底へと沈んでく。

あたしは、もう首だけ人間になっていた。  
床からぴよこんと生えた、首から上だけ人間。

可笑しい。ウケる。

端から見たら、きつと爆笑。

あ、これ写メ撮りたい。変顔で撮って由美達に見せたい。  
なんて。

……ふと思う。

まあ、別に死んでもいいや。

毎日つまらないもん。

彼氏の公平とも、最近はマンネリだし。

実際生きてたって死んでたって、大して変わらないんだから。  
生きててもダルいだけだから。

それにどうせ夢なんだし、死んでも痛くなんかないはずだ。

そうやって愚かにも色々と考えて、バカみたいに無意味な人  
生を少しだけ嘆きながら、じわじわと沈んでいく。

あたしは、自分の中にどんどん潜る。

そうして口が浸かり、次に鼻が浸かり、最後は頭が全部沈んだ。

あたしは本能的に目をつぶった。肺の中にあつた空気が、少しずつ  
減っていく気がする。

……あ。息。息止めると凄く苦しくなるの。思い出した……。

やだ、苦しい。何よこれ。息出来ないし。苦しいよ。イヤ。やっぱ  
り、イヤかも。イヤだ。死ぬの。イヤだよ。これ夢。夢だよ。夢  
なんだから。だから、絶対覚める。絶対。こんなのない。ありえな  
い。ありえないから。

絶対に、夢。

必死な気持ちで目を見開いた。

緑色と茶色が混じった色合いの、まるで腐りかけの海の中。得体の知れない小さな死骸のような物がそこら中にいくつも浮かび、時間が止まったみたいに漂っている。

異様な空間。

あたしも、その中を同じように漂っていた。

徐々に視界が暗くなっていく。眼球が、何かに侵されていくのを感じる。

そして。

あたしの心臓が止まり、脳が腐っていった。

## （後書き）

『夏のホラー2009』参加作品です。

swamp

「名」 沼地

「動」（他） 水浸しにする； 沈ませる； 途方に暮れさせる；  
圧倒する（with）.

自作『バリア』の別バージョンです。バリアをベースにして90%程書き換えました。

構成的には擬似的作品なので、僕の既存作を読んでも方には物足りないかもしれません。

今作での違いは、異変の種類と既存作で弱かった要素のカバーです。後者は特に夢か現実か解らないという所。加えてバカさや派生する狂気、ポップ度の増加を。

女子高生の一人称なので既存作よりも“らしさ”を重視して、言葉選びも合わせました。

10代女子の文章的再現や自己の内面と向き合う様な内容から、僕の中では文学性の高い物になりました。

苦しみも全面に出しました。息苦しさ、無呼吸時の恐怖感と苦痛。上手く表現出来てればいいんですが。

ゲームのカルドセプトや様々なモンスターが好きな僕が当初スワンプと聞くと、言葉の意味を知らなくても不気味な怪物が突然現れる様な印象がありました。

今回タイトルに使って、久々に良題になったなあと思います。沼地の怪物とかそういうのもやってみたいですね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6828h/>

---

スワンプ

2011年10月3日02時43分発行